

令和四年夏季号

現存の優品

日本刀

武田 大膳 入道 信玄 大夫



現存の優品 ⑨4 目次

刀	無銘 伝雲生（嘉元―備前）鎌倉中後期	3
太刀	備前長船秀光	4
脇差	無銘 法華（南北朝―備後）	5
脇差	無銘 末左（大左一門）（南北朝中期―筑前）	6
短刀	助長（石堂）（明心―近江）室町後期	6
刀	九州肥後同田貫兵部（天正―肥後）桃山時代	8
刀	肥前国住近江大掾藤原忠広（寛文―肥前）江戸前期	9
刀	相州住綱広	10
大小鐔	寛永十三年二月吉日（江戸初期―相模）	12
鐔	樂水堂常成（花押）（江戸中期）波濤雲龍図	13
鐔	（花押）（江戸後期）初日二見ヶ浦図	13
鐔	無銘 加賀象嵌（江戸前期）紗綾・七宝文散し図	13
鐔	無銘 赤坂三代忠虎（江戸中期）苔に蟾螂図	14
鐔	無銘 中根（江戸中期）三鈴方円図	14
鐔	無銘 柳川派（江戸後期）親子鶏図	15
目貫	無銘 柳川派（江戸後期）龍虎豹図	15
目貫	無銘 榮乘（江戸初期）一匹獅子図 金無垢地	16
目貫	無銘 榮乘（江戸初期）玉掴み龍図	16
小柄	紋頭乘 光美（花押）（江戸前期）	17
小柄	無銘 程乘（江戸前期）燭台図	17
小柄	大森英秀（花押）（江戸後期）葉告に自在鉤図	17
縁頭	仙台住 清定（江戸中期）双雨龍図	17
小柄	柳川直光（花押）（江戸中期）伊勢海老に蛤図	18
小柄	春明法眼（花押）（棟銘）（江戸後期）幕末 蜘蛛図（龍獅意箱入り）	18
縁頭	美濃住 光仲（江戸中期）秋草に虫図	19
小刀	小鍛冶義人 彫同作（現代―東京）共箱つき（令和二年）	19
脇差	（義紋）以南蛮鉄於武州江戸越前康繼（寛永―江戸）江戸初期	20
脇差	青龍軒盛俊造之 文久二年壬戌二月日	21
刀	弥山大権現宝剣 彫同作 行年六十一歳（幕末―周防）	22
刀	越前守助広	22
刀	寛文七年二月日（江戸前期―大坂）	24
刀	源正雄 安政六年八月日	24
刀	為西野源祐禰 以蝦夷地知岸内沙鉄造之（幕末―江戸）	25
太刀	義人／平成壬申歳六月（平成四年）（現代―東京）	26
太刀	宮入行平作／昭和四十九年春日（昭和―長野県）	27
短刀	岩井鬼晋磨正俊 万延元年八月日	27
	於上総鶴牧 赤心報国（幕末―江戸）	27

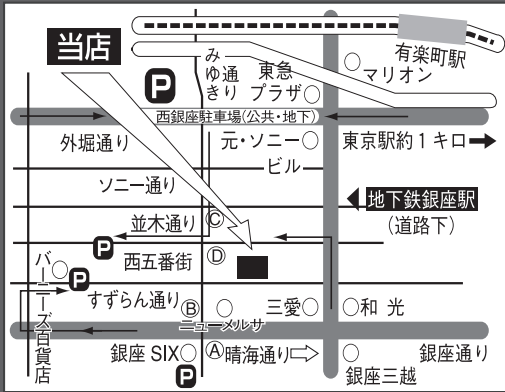
●価格は説明文の末尾にあります

表紙題字：「日本刀」 東大寺長老 故・清水公照師筆
表紙：武田大膳大夫入道信玄 一猛斎芳虎画

銀座・刀剣柴田 夏季即売会

令和4年7月1日(金)～4日(月)

●当店への交通は
地下鉄銀座駅から徒歩1分、
JR有楽町駅から徒歩8分。
東京駅からでもタクシー5分、
基本料金で来ます。



【会期中の営業時間】
朝10時～夜6時
(3日の日曜も営業)

＊お車では、上記4カ所の駐車場が便利です

〒104-0061 東京都中央区銀座5-6-9 ☎03(3573)2801
ホームページ：http://www.tokenshibata.co.jp ☎03(3573)2804

ご送金のご案内

- ①三井住友銀行／銀座支店 普通預金 7038644 (株)刀剣柴田
(送金手数料、お引きください)
- ②郵便局／振替口座 00190-7-52891 刀剣柴田
(必要でしたら振替用紙、ご請求ください)

ご挨拶

ご報告が少し遅れましたが、弊店は三月にビル建替えのため、旧店から10m先に引越しました。一階・地下を新装して、とてもきれいにできあがりました。コロナもそろそろ大丈夫そうなので、どうぞご来店下さい。(うら表紙に案内写真あり)

弊社だけでなく銀座は建替えラッシュです。左図に示しましたがみゆき通り沿いが特に多いです。①みづは銀座通支店、②黒沢ビルと隣二軒、③旧文芸春秋ビル、④コメ兵が入っていた約百坪の土地などが一斉に解体中です。ほかに有名な中銀カプセルビル(黒川紀章氏設計)が4月から、ソニービルも昨年から解体しています。

逆に新しく開店した所もあります。例えば弊店の目の前のメルサ(名鉄)は一階にスイーツ専門のマルシェをオープンし、ケーキ・チョココレート・和菓子の店が並び、毎日女の人で満員です。一ヶ7000～8000円もするのですが、夕方4時5時には売却済になる店が多く、ビックリです。

どうぞ銀座においでください。また、ご注文のほうもよろしく願っています

令和四年七月 柴田光隆

刀 無銘 伝雲生

(嘉元—備前)

鎌倉中後期 約七〇〇年前

鑄造り 刃長二尺二寸二分半 (67・4 cm) 反り三分五厘 元巾九分八厘 先巾五分六厘 重ね二分一厘 大磨上げ無銘、やや細身で反り浅く、鑄高めにわずかに棟を卸し、小切先の品よい姿。地鉄、小板目

主調に差し表は杢目をよく交え、地沸厚くつき、凜とした鍛えて先の方は淡く映りかかる。刃文、焼きの細い直ぐ調に小沸が締まり、また元の方は小沸深くなり、小足よく入り、明るく輝く。帽子、直ぐに先き小丸。

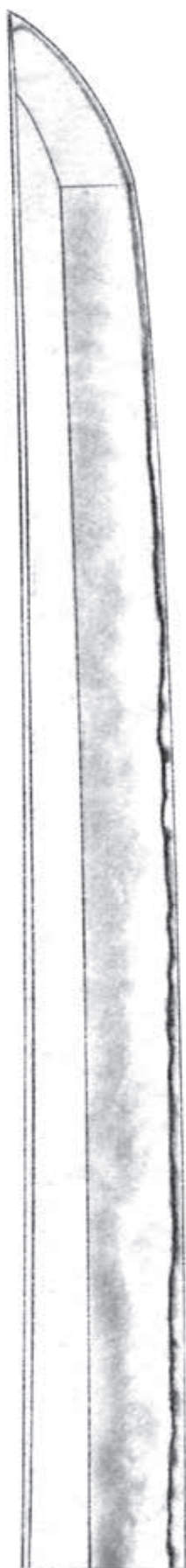
鎌倉中後期から南北朝期にかけて、備前国鞆飼庄に、同国長船派とは作風を異にする刀工群が現れ、この一派を雲類と呼んでいる。時代的には、雲生が

鎌倉中後期、雲次が鎌倉末期から南北朝初期、雲重が南北朝中期となる。備前の刀工ではあるが京風が多分に加味され、直刃主調である。本作は細身で刃の焼巾も細いが、同派で一番古い雲生に極められた。地鉄の鍛えはその極めにふさわしくきれいである。

金着二重鰭 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付 一五〇万円

全身を除いて原寸



太刀

備州長船秀光^{ひでみつ}

応永二年二月日

(室町初期—備前) 六二七年前

鑄造り 刃長二尺三寸八分(72・3cm) 反り六分

元巾九分八厘 先巾六分 重ね二分八厘

わずかに磨上げられているが、身巾広く反り高く
中切先に、重ね厚く重量があり、往時の力強い姿を
残している。地鉄、板目ゆつたりと流れて肌目が立

ち、空目をよく交えて地沸がつき、淡い映りが立つ。
刃文、互ノ目丁子・尖り互ノ目・角互ノ目を交えて
小沸がよくつき、匂い口やや沈む。帽子、浅く乱れ
込み、先き尖り気味に返る。

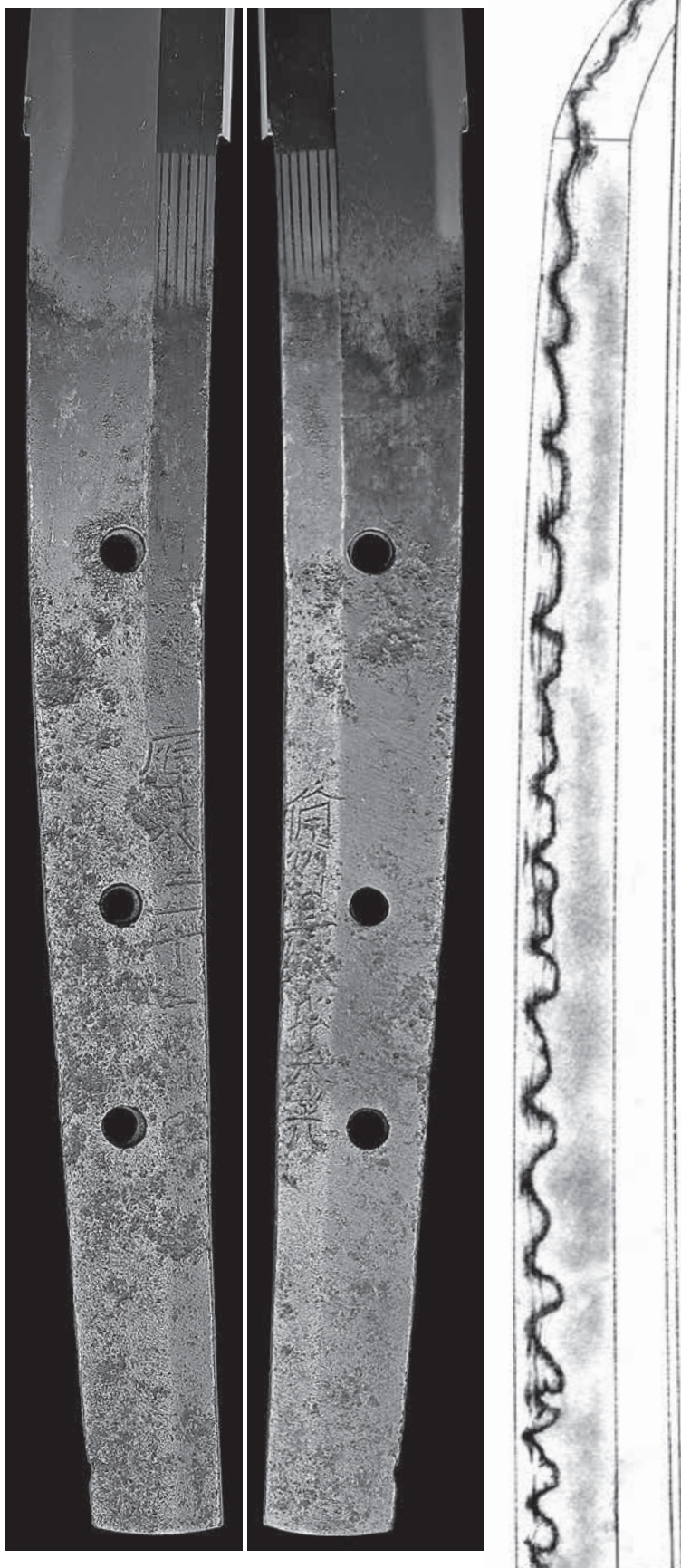
南北朝中期から末期にかけて備前で活躍した小反^{こさへ}
一派を代表する秀光の太刀である。小反の刀工は秀
光を筆頭に光弘・成家・恒弘・家守・光重らが挙げ
られ、作風は、初期は兼光の弟子たちの作風に似て、
末期になると刃文が小ずんで刀身も小ぶりになる。

中でこの秀光には代があり、初代は建武、二代が応
安、三代が室町末期から応永八年まで、それ以降は
四代とされる。山田浅右衛門の選ぶ「最上大業物」
の13工のうちに選ばれているのも、この数の多さか
らであったのであろう。本作は三代目の作で、年紀
が入ることは貴重で、大ぶりであることから注文
品であったと思われる。

金着一重 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

三〇〇万円





脇差 無銘 法華^{ほっけ}

(南北朝—備後) 約六四〇年前

薙刀直し造り 刃長一尺三寸五分(40・8cm) 反り四分 元巾一寸 先巾八分七厘 重ね二分強

小ぶりながら反り深くついた姿のよい薙刀直しの脇差で、表裏に掻き通しの薙刀樋と添樋を刻する。地鉄、板目よく錬れてつみ、刃寄り樋がかり、地沸

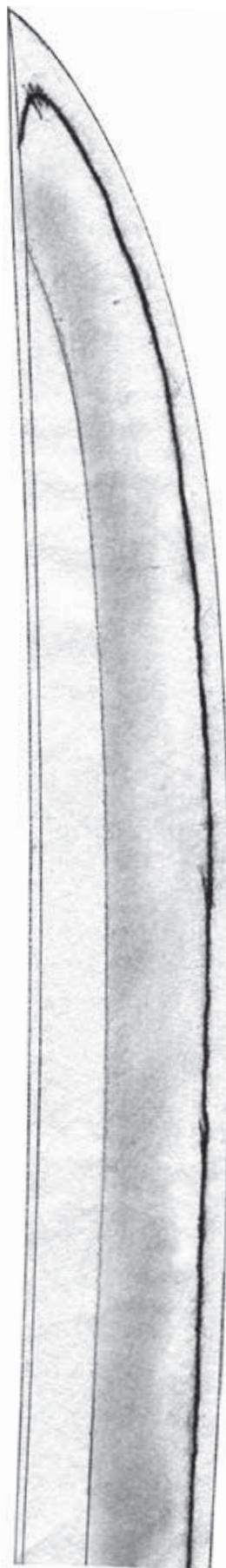
厚くついて美しい肌合いとなり、白気映りたつ。刃文、中直ぐ仕立てで小沸つくも、匂い口締まり、浅いのたれ交り、処々ほつれかかる。帽子、直ぐに小丸、先わずかに掃きかける。

法華一乗派は備後の国の刀工。同国の三原派とは系統を異にして、流祖を国分寺助国(鎌倉末期—南北朝初期)としている。一派は南北朝から応永をへて室町中期にかけて栄えた。作風は、板目がねつと

りし、直刃主調とはいえ、のたれ・小互ノ目が垣間見られるなど、三原物と似通うものの一味違ふところがある。本作は地鉄がよく、鑑定書でも「時代南北朝」と、法華でも古いところに極められた。

銀無垢一重鑑 白鞘
保存刀剣鑑定書付 四〇万円

全身を除いて原寸



脇差 無銘 末左すえさ (大左一門)

(南北朝中期—筑前) 約六五〇年前

薙刀直し造り 刃長一尺七寸六分(53・3cm) 反り四分六厘 元巾九分八厘 先巾八分七厘 重ね二分四厘

長さ頃合いで、先反り強くついて重ね厚く、鎬高く棟を急に卸した薙刀直し造りの脇差で姿よい。地鉄、板目肌立ち大板目がかり、ゆつたりと流れを交

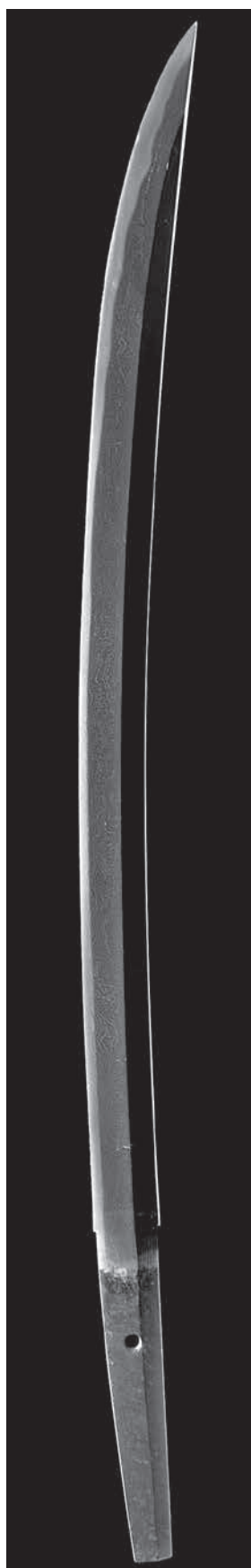
えてザングリとし、地沸ついて鉄色黒めとなり、地景入り趣のある肌合いとなる。刃文、小沸づいた浅い互の目主体で小のたれ交り、地からんでほつれや砂流しかかり、小足入るも匂い口沈みごろとなる。帽子、乱れ込んで先き焼詰める。

南北朝初期、筑前国には左文字が出現し、それまでの九州物に見られない相州伝を導入し、乱れ主調で地刃の冴える作風を樹立した。一門の刀工たちも師風を受け継いで大いに繁栄する。それら門下の刀

工たちには安吉・行弘・国弘・吉貞・弘行・弘安などがおり、これらの刀工および作刀を汎称して「末左」と称している。いずれも南北朝期の作で優れた技量を示す。この脇差は薙刀直しの大磨上無銘であるが、いかにも雰囲気のあるものである。

全身を除いて原寸

金着一重 鐙 白鞘
特別保存刀剣鑑定書付
八十五万円



短刀

助長すけなが (石堂)

(明応—近江)

室町後期 約五二五年前

平造り 刃長八寸一分半(24・5cm) 反りなし
元巾六分六厘 先巾四分四厘 重ね一分六厘

無反りの身巾狭い短刀で、重ねも薄めでスラリとし、中心尻は加州の尻とやや似ている。地鉄、小板

目つき棟寄りに柃目を交えて地沸がつく。刃文、直刃が浅いのたれがかり、小沸が明るく締まり、簾調の二重刃がしきりにかかり、大きな飛焼もさかんで棟焼もあり、淡い映り立つ。帽子、浅くのたれ込

で二重刃がかかり、小丸に返る。

珍品の短刀である。江州助長は、備前一文字助宗の裔といい「江州蒲生住助長／明応八年」の作が残されている。その住地は同郡石塔寺の傍らで、のち

石塔を氏として、これが近江石堂の発祥とされる。

助長は祖の古伝再興をめざし、その子孫は石道・石堂を名乗り華やかな一文字伝を焼くという。たしかに新刀期に入って江戸石堂(光平)、紀州石堂(康広)、

大坂石堂(長幸)、福岡石堂(是次)と、代表をあげただけでも石堂一派の躍進・活躍はめざましく、助長も子孫がここまで繁栄するとは考えていなかったろう。しかし助長自身の残された品は本作も含めて小のたれ調の刃文で、同時代他派との差異はとりたてて見受けられない。スッキリした短刀拵に入っており、金高蒔絵(表に五ヶ)と目貫は笹竜胆紋。珍品でもあり、同紋を使用するそこそこの人物の持ち物であったのであろう。

金着二重鍔 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付 六十五万円

全身を除いて原寸



黒呂塗笹竜胆紋金高蒔絵合口拵 (目貫) 笹竜胆紋図 赤銅地 容彫 金・銀色絵(目釘兼用)
(拵の総長 三六・五cm)

刀 九州肥後同田貫兵部どうだぬきひょうぶ

(天正—肥後)

桃山時代 約四二〇年前

鑄造り 刃長二尺三寸一分(70cm) 反り六分六厘
元巾一寸一分 先巾八分一厘 重ね二分七厘
区をわずかに送るが、定寸に反り深めにつき、身
中広く元先の巾差も落ちず、鎬高く重ねも厚く、中
切先の延びる頑丈で力強い姿。地鉄、板目が肌立つ
て大板目調となり、流れ交じり、地沸厚くついて白

気風の映り立つ。刃文、直ぐ調に小互ノ目交えるも
沸崩れ気味となり、砂流しや湯走り、ほつれがしき
りに交じる。帽子、乱れ込んでさかんに掃きかけ、
尖り気味に返る。

一昔前、テレビや劇画の「子連れ狼」「破れ傘刀
舟」等、猛烈な斬り手の使い料として斬れ味が喧伝
され、その後もテレビ・小説に盛んに登場し、今な
お人気の高い肥後熊本・同田貫の一振である。同派
の最盛期は、太閤秀吉の時代の加藤清正が肥後を治
めることになった時であり、豪勇無双の加藤清正の

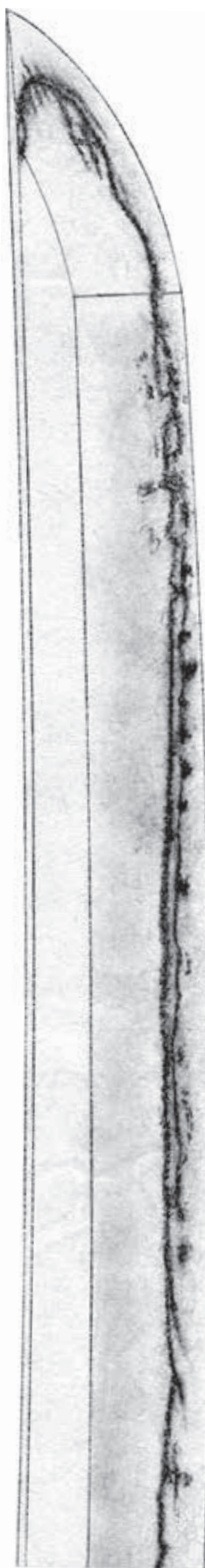
気風を反映し、その作刀は武骨で野趣に溢れている。
上野介正国(信賀)が一番有名で他に各工が知られ、
また流派名だけの作も多い。今回の兵部は上野介と
ともに一派中では現存刀が多い。同田貫一派は加藤
家の没落に殉じ槌を捨てた者もあり、兵部以降は衰
退している。

金着二重鍔 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

藤代松雄師鑑定書付

二三〇万円



全身を除いて原寸

薙刀 肥前国住近江大掾藤原忠広

(寛文―肥前)

江戸前期 約三五〇年前

薙刀造り 刃長一尺六寸八分(50・9cm) 反り七分
元巾九分八厘 先巾一寸三厘 重ね二分七厘半

生ぶ姿の身巾のある立派な薙刀で、元に薙刀樋を
掻き、重ねごく厚く、上半は棟を急に卸して鎬高く、

その鎬は菖蒲造りのように切先の先端まで届く。地鉄、小板目が小太を交えてきれいに錬れ、地沸よくつきまことに精美。刃文、太めの中直刃が沸・匂い深く、刃中に葉が二重刃のようにつながり、刃縁の小沸の中にごく細かい金筋も見られる。帽子、直ぐに小丸、深く焼下げて中途まで下り、棟焼となる。

肥前新刀を代表する二代・近江大掾忠広には薙刀の作品がまま見られ、皆、姿のよいものである。本

作は特に地鉄がきれいで、その鍛えによる得意の中直刃も沸・匂い深く、葉もよく入り見事である。拵は柄が長いので蕪巻の下が切られてしまっており残念であるが、しっかりとした太身の薙刀拵。黒呂塗の鞘は傷みなく、太刀打ちは金漆の上に黒漆を塗り、一部剥けて下の金塗が顔を出し、力強く風情がある。

銀無垢一重鍔 拵付(白鞘もあり)
特別保存刀剣鑑定書付 九十五万円



全身を除いて原寸

●次頁に続く

●前頁・忠広の拵

黒呂塗鞘雑刀拵 〈雑刀金具〉 素銅磨地 〈喰出し鐔〉 無文 四分一磨地 長丸形（拵の総長 一〇四cm）



刀

相州住綱広

つなひろ

寛永十三年二月吉日

（江戸初期―相模） 三八六年前

鑄造り 刃長二尺七寸一分強（82・1cm）反り五分
三厘 元巾一寸六厘 先巾七分三厘 重ね二分四厘
刃長二尺七寸を超える長刀で、反りも深く、棟を
卸して重ね厚く、豪刀である。表に「若宮大権現」

の力強い文字彫、裏に十一面観音の梵字と護摩箸を
刻する。地鉄、板目で肌目が強く立ち、地沸が厚く
つき、地景風も入る。ただ強い火加減の鍛えのため
か、表の方、鑄地や棟にそこそこの鍛えの割れが入



る。刃文、焼き高く暴れた互ノ目乱れで、小沸出来に種々の形をとり、飛焼もさかんであるが全体に沈みこころ。帽子、直ぐに小丸、裏は先に島刃を置く。たいへん長寸の相州綱広の豪刀。年紀から四代目勘右衛門の作と分かり、おなじみの伊勢大掾綱広の

先代ということになり珍しい。徳川家も三代目家光の時代に入った時期であるが、まだまだ慶長の戦いの息吹が残っていたころであろう。拵も長寸の中身に合わせた大ぶりの太刀拵で、黒塗鞘に金蒔絵で各種の家紋を散し、柄糸・渡り巻は古びた薄緑色の糸

巻。長小尻の先の方を欠き上下の長覆輪が残るだけであるが、よく残ってきた大きな太刀拵である。

金鍍金二重鍔 拵付（白鞘もあり）
特別保存刀剣鑑定書付
二四〇万円

全身を除いて原寸



金蒔絵家紋散し黒呂塗鞘太刀拵

（総金具＝縁頭・責金・帯取り金具・長小尻）唐草文図 赤銅磨地 線彫（目貫）兜に太刀図 赤銅地 容彫 金色絵
（鐔）無文 赤銅磨地 太刀木瓜形 薄肉彫（柄・渡り巻）金欄着薄緑糸巻（拵の総長 一一三・五cm）





小



大



大小鐺 渠水堂常成（花押）

波濤雲龍図 長丸形 四分一磨地 鋤出彫 毛彫金
・銀・赤銅・素銅象嵌色絵 金点象嵌 角耳小肉
四分一地の大小鐺で、その彫技は見事である。大きな龍と荒れ狂う波濤・雲をメリハリつけて鋤出彫する。金色絵の火焰をまとった龍の顔付はいたって精悍で威厳も感じられ、処々に小さな色絵を加える。目玉は金色絵、瞳は赤銅、舌に素銅、牙を銀色絵する。鱗を一枚一枚丁寧に鋤出彫し、波の飛沫は金点象嵌。裏は飛沫を上げる波頭、雲の渦を彫り、毛彫で風雨の激しさを表す。

常成は近江国国友村の鉄砲鍛冶・辻氏の一族。鉄砲鍛冶の辻左衛門とその弟で江戸で宗与・奈良一門らに学んだ臨川堂充昌（享保六年〜安永五年）の従兄弟にあたり、宝暦ころの工と推察される。銃身の彫技も行う。鉄砲鍛冶の出目だけあり金属の扱いに巧みであり、また龍図は臨川堂に多い。早世のため残存作品は少ない。本作は未使用の名品で、これだけきれいで立派な大小鐺はそうない。江戸中期。

◆大 縦七六・二mm 横七三・一mm 厚さ五mm
小 縦七三・九mm 横七一mm 厚さ四・六mm

特別保存刀装具鑑定書付
上製箱入り 八十五万円



鐔 (花押)

初日二見ヶ浦図 赤銅磨地 木瓜形 高彫 片切・毛彫 金・銀象嵌色絵 角耳小肉 櫃孔・金埋め

赤銅磨地に伊勢の夫婦岩で有名な二見ヶ浦図を彫った大ぶりでどっしりとした重量感ある鐔。遠景に水平線を一直線に彫り、昇る旭日と帆船、空には雁の群れを描く。旭日は金平象嵌、光線を毛彫、帆船は銀色絵し雁の群れを毛彫。近景は夫婦岩と注連縄・紙垂を銀色絵し、波は片切彫で小波から大波、岩近くの沸き立つ波に変化をつける。裏は穏やかな波。二見の浜は神々の常世の国から寄せる波が最初に届く「聖なる浜」で、ここで身を清め祓をしたのちに伊勢神宮参拝するのが古来からの習わしとなっていた。

銘はなく「花押」のみだが、その花押で大森派の工の作ではないかと思われる。江戸後期。

◆縦八五・九mm 横七七・一mm 厚さ五・五mm

保存刀装具鑑定書付

上製箱入り 十八万円



鐔 無銘 加賀象嵌

素銅平象嵌 丸耳 赤銅磨地に紗綾文を金線平象嵌し、七宝文は銀・素銅平象嵌と金線象嵌の二種で、それぞれ配置よく散らす。紗綾文の原型は梵字の卍で、卍繋ぎ・卍崩しといわれる。卍の図形には「幸運福来」の意味があり、七宝文と共にめでたい図柄である。

加賀象嵌は加賀藩・前田家の庇護の下に美術工芸が栄え、馬具の鍔象嵌から発展した加賀象嵌の華麗な平象嵌工法はことに著名である。藩主導の製作のため原則みな無銘だが、従事した金工の数は家名だけでなくでも二十数家あり繁栄ぶりがうかがえる。今回の鐔はその中でも時代が上りそうである。江戸前期。

◆縦六九・六mm 横六六・五mm 厚さ三・六mm

保存刀装具鑑定書付

上製箱入り 十六万円



鐔 無銘 赤坂三代忠虎 たかしら

荻に蟠螂透し図 鉄地 丸形 透し彫 丸耳
鍛え良好な鉄地に、荻と蟠螂の図を透し彫する。たいへん厚みがありズシリと重い。流れるような図の透しであるが、耳際でしっかりと繋ぎ、安定感がある。

無銘であるが赤坂・三代忠虎に極まる鐔。赤坂鐔は江戸初期の元和・寛永の初代から、二代・三代まで在銘品は皆無である。忠虎は二代忠正（延宝五年に没）の子で、延宝から元禄をへて宝永四年までの約三十年間活躍した。初・二代の伝を継ぐが、作風は「厚手・大ぶり・力強い」となり、耳の作りはこ



鐔 無銘 中根 なかね

三鉈方円図 鉄磨地 丸形 銀平象嵌 耳・打返し 両櫃孔・赤銅埋め
ツヤのある鉄磨地に、表裏ともに二重四角の中に三鉈を規則正しく銀線の彫込め象嵌をする。わずかに打返した耳も張りがあり、図柄を引き締めている。

鐔の丸い形を天、中の四角を地とみる「天円地方」で中国の宇宙感を意匠とし、地の四方には四個ずつ鉈を彫る。鉈は金剛杵の独鉈・三鉈剣に代表される煩惱を拭い去り、邪を祓い、身を守る仏具。

肥後金工・中根家の祖先は武士で徳川・加藤・細川の各家に仕えている。在銘品はなく、余技で正阿弥写しの象嵌鐔を製作したと伝わる。この鐔は三鉈を銀線で平象嵌しているが、ほかに中根鐔と鑑するものでは「杉森方円図」が有名。一般には左右大透しの海鼠透しと称される鉄丸鐔に、耳に雷文を連続して銀象嵌する鐔が多い。江戸中期。

◆縦八五・五mm 横八五・四mm
厚さ四・一mm

保存刀装具鑑定書付
十四万円

く丸くなるものである。本作は、地鉄は初・二代に比べると細やかで、錆色は地鉄のよさを表して自然な赤紫の深い色をしている。櫃孔を透しの一部に仕立てるのは赤坂鐔の得意とするところで、荻と蟠螂の取り合わせは赤坂鐔によく見かけ、人氣の意匠の優鐔である。江戸中期

◆縦八〇・三mm 横七九mm 厚さ七・八mm

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 四十五万円



鐔 無銘 柳川派

親子鶏図 赤銅七々子地 長丸形 高彫 金色絵
角耳小肉

整然と蒔かれた赤銅七々子地に、親子鶏図を高彫金色絵する。親鶏は大きく立派で、鶏冠や羽・尾・鉤爪を毛彫で鮮明に彫り、小さなヒヨコは柔らかな産毛をさらに細かく毛彫する。そこかしこに道芝と貝殻を置き金色絵。ヒヨコの表情が可愛らしく、親鶏に隠れたり、小さな羽を広げたりと遊ぶ様子をいさいさと描く。

柳川派得意の赤銅七々子地に小動物を彫った鐔。表裏の親鶏の彫りは特に高く、金色が輝き目立つ。江戸後期。

◆縦七二・一mm

横六八・六mm 厚さ四・八mm
保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 二十四万円

目貫 無銘 柳川派

龍虎豹図 赤銅地 容彫 金色絵

上質の赤銅地の目貫で、金色絵を効果的に施す。表目貫は龍を金色絵し、赤銅に金の斑点色絵の豹を尻尾と爪で押さえつけて噛みつく。裏目貫の龍は体が赤銅で角・火焰を金色絵にし、金色絵に赤銅縞の虎を鋭い爪で掴んでいる。龍と虎豹の取っ組み合いの様子を、彫り高く毛彫を細密に加えて彫る。どちらも龍が強い。

鑑定書で柳川派に極まる繊細で存在感のある目貫である。柳川派は家祖の政次が初代・宗与に学び、実子の直政は吉岡因幡家の門に学んだのち、横谷宗珉に師事した。のち直光・直春と名工が続き、門弟も多い。作風は後藤家に初め入門していた横谷宗珉の弟子筋であるので家彫に似るところがあり、堅実さと上品さを感じさせるものである。江戸後期。



特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 二十五万円



拡大



目貫 無銘 栄乗

一匹獅子図 金無垢地 容彫 陰陽根

一匹獅子を金無垢地に大きく力強く彫る。無銘であるが後藤宗家六代目・栄乗に極まる。彫りは「山高く谷低く」の後藤の掟通りで、踏ん張る獅子の両足は力強く、裏は陰陽根がしっかりと残る。

栄乗は宗家五代・徳乗の長男として天正五年に生まれた。父に従い豊臣家に出仕するが、関ヶ原合戦後は徳川家に遠慮して京都郊外に引退する。元和二年に叔父・長乗の取り成しで徳川秀忠から分銅大判

等改め役と彫物役家に任じられる。翌年の元和三年、江戸にて41歳で没。天下が信長、秀吉、家康と移りいく激動の時代に生き、後藤家再興と伝統を守りぬき、徳川幕府の抱え工としての道を開いた。

栄乗の目貫は祐乗・宗乗に類似して地金がわりと薄く作られるが、この目貫は厚みもあって肉取りよく、獅子の筋肉が躍動するさまは素晴らしい。大きくずしりとして出来優れた優品である。江戸初期。

保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り 五〇万円



小柄 紋頭乗 光美 (花押)

玉掴み龍図 赤銅七々子地 高彫 目に金点色絵
裏・喃金

目のつんだ漆黒の赤銅七々子地に、しっかりと宝珠を掴む龍を赤銅磨地で据紋高彫する。顔や髭・爪・鱗・背ビレなどこまかく丁寧に彫り、龍の両目のみを金点色絵する。この龍は品よく繊細である。

後藤宗家七代・頭乗は五代徳乗の次男で、兄の栄乗が早世し、その世子の即乗が幼年のため七代を継ぐ。天正14年の生まれで寛文三年78歳で没。即乗に家督を譲った後(寛永四、五年)は加賀前田家に招かれ、従兄弟の覚乗と隔年交替で金沢に出張し、加賀後藤の基礎を築いた。後藤家の中興の祖ともいわれる名工で、裏の銘は「紋の龍は頭乗によって作られ、十五代光美(江戸後期)が小柄の台板を喃金仕立てした」の、極め銘である。江戸前期。

保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り 四〇万円

小柄 無銘 程乗

燭台図 赤銅七々子地 高彫 金・銀・素銅色絵
裏・赤銅磨地

目のつんだ赤銅七々子地に色金を駆使して燭台図を彫る。蠟燭は銀色絵し、炎を素銅とし、赤黒く炎のゆらゆら動くさまは幻想的である。燭台の竿・皿の縁取り・蠟燭止めは金色絵する。

程乗は後藤家九代で七代・顕乗の子。八代即乗

の早世に伴い、その子・十代藤乗が幼少のため九代を継ぐ。慶長八年京都で生まれ、延宝元年71歳で没。また加賀前田家の扶持を受け加賀後藤の礎を築いた。燭台は明かりをとす道具であるが、明るい未来を期待する。無銘ながら程乗の個銘に極まる洒落た後藤の小柄である。江戸前期。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 十四万円



小柄 大森英秀(花押)

薬缶に自在鉤図 赤銅七々子地 高彫 素銅据文
金色絵 裏・赤銅磨地

目のつんだ赤銅七々子地に、薬缶をつるす自在竹を高彫金色絵し、長さを調節する鉤を赤銅とする。下の薬缶は素銅据文で、ふっくらとした胴の丸みで高く彫られ質感がよく出ている。

英秀は大森派の初代・英昌の甥で、享保15年生まれ。内弟子として修業した後に養嗣子となり二代目

を継ぐ。作風は横谷流の赤銅七々子地に高彫色絵の彫法を基本とするが、これに「大森式」と呼ばれる彫技を加味する。英秀の高彫は据文式の手法が多い。名声高く、多くの門弟も養成する。寛政10年に69歳で没。英秀は牡丹獅子や波濤の図が有名であるが、本作は江戸前の図柄で珍しい。英秀の一作風を知る作品で、基本の彫法を踏まえた上での洒落た作風はさすが名人の作といえる。江戸後期。

特別保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 五十五万円



縁頭 仙台住 清定

双雨龍図 赤銅石目地 鋤出彫 金色絵 金平象嵌

地を赤銅石目に仕立てて落ち着いた色合いの黒地に、縁・頭ともに雨龍図を地面より少し高めに金線掘込め象嵌する。フチの上下、またカシラの中央と左右を鋤出しして磨地に仕立て、二種の連続模様を圖案式に金線平象嵌する。小縁も金色絵。

清定(初代)は八三郎と称し草薙屋を屋号とした。

仙台で正村七右衛門に師事し、のち江戸に出て大森家に学び、また仙台に帰り伊達家の藩工になる。清定の活躍期間は天明から文化文政初期の江戸中期であろう。赤銅石目地に金を多用した精巧な象嵌が特徴で、洪谷家が行った平象嵌に、金を多用する仙台象嵌に創意工夫を加えて新機軸を開発した。中でも本作は保存がよく出来がよい。江戸中期。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 十八万五千元



小柄 柳川直光 (花押)

伊勢海老に蛤図

赤銅七々子地 金紋 金小縁 裏喃金時雨鑑

目のつんだ赤銅七々子地に伊勢海老と蛤を金紋で置く。大きな海老の頭胸甲殻にはしっかりと棘を彫り、まっすぐな触覚の硬い殻や尾などを丁寧に毛彫する。対照的に蛤はツルツルで丸みを帯びた金紋。蛤は殻合わせの特徴から夫婦相合の象徴とされる。正月・慶事の席に供する伊勢海老に、蛤を組合せた図で、めでたい婚礼を表している。

柳川直光は享保18年に奥州相馬で白金師の子として生まれた。18歳の時に江戸へ上り柳川直政入門のち養嗣子となり柳川姓を名乗り、直政の没後に家業を継承して柳川家二代目として活躍する。師の直政の嫡孫・直春が幼少であったので後見をつとめ、また多くの子弟を養成し、柳川派の発展の礎を築いた。文化五年に76歳で没。作は柳川式の赤銅七々子地に高彫色絵や金紋の工法で花鳥ほかを描くが、人物は彫らない。本作も金紋を高く彫り、堅実巧妙、保存よく豪華な品である。江戸中期。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り
四〇万円



小柄 春明法眼 (花押) 〈棟銘〉

蜘蛛図 赤銅磨地 高彫 金・銀象嵌色絵 裏・金削継ぎ翁鑑

鏡のような赤銅磨地に蜘蛛を一匹、据文式の高彫で銀色絵する。腹から出した長く強靱な蜘蛛の糸を高彫し、厚く金色絵する。目を金点象嵌し、腹部の模様を金色絵。

河野春明は天明七年に生まれ、14歳の時に柳川直春家入門した。文化年間から春明と名乗る。居宅は江戸の本所付近であったが、東北に出張製作し晩年は越後へ赴き安政四年新渴で没。享年71歳。江戸、また東北・越後で各地の工人と交流また育成をした。作風は、初め柳川派の流儀を基に赤銅地に高彫色絵で人物・風景・花鳥を精巧確実に彫っており後藤家を目標としたようだ。後半は技法・題材とも自由奔放に広がって、一種近代的な様式を確立する。江戸後期から幕末にかけての江戸金工の巨匠の一人といえる。本作もその作例で、蜘蛛の下には裏の句「春風や蜘蛛の」に続く三文字を彫っている。光村利藻氏旧蔵品の一つ。江戸後期・幕末。

龍獅堂二重箱入り (隆雄箱書)
特別保存刀装具鑑定書付 七十五万円



棟銘拡大



縁頭 美濃住 光仲

秋草に虫図 赤銅地 深彫 金色絵 素銅象嵌

赤銅地を深く鋤下げ、秋草と秋虫を高く彫り出す。秋草は菊・桔梗・笹竜胆・薄、秋虫はギョロ目のカマキリに長い触覚の鈴虫、長肢の蟋蟀で、それぞれ金性を変えた金色絵を施し、小さく葉などは素銅としている。地面を垂直に深く鋤下げる美濃彫独特の深彫と呼ばれる技法を全面に駆使し、加えて天井板と小縁も金色絵を施すなど、たいへん華やかな縁頭

である。

光仲は吉長・光伸・光曉とともに江戸中期の美濃彫を代表する工。彫り口深く高彫金色絵を多用した作で知られる。美濃彫にはあることだが、あまりにも深く彫りすぎたため地が抜けていることがあり、今回も一ヶ所見られる。本作は金の色合いが華やかで、彫り口もくつきり、擦れない優品である。江戸中期。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り 九万五千元



小刀 小鍛冶義人 彫同作 (現代—東京都) 令和二年の作

刃長四寸七分(14・3cm) 全長21・7cm

東京都無形文化財保持者の吉原義人刀匠による小刀で、ふつうの小刀よりは一まわりほど大きく造られ、厚みもややある。表に不動明王の長梵字、裏に草の俱利伽羅を力強くキリッと彫り、作刀だけにおさまらない師の技量の高さがうかがえる。地鉄、こまかい柃目鍛えが小板目風に錬れてつみ、地沸こまかにつく。刃文、浅い波形の互ノ目をゆつたりと連ねて足が入り、匂い出来で刃縁が締まりこころに明るく輝く。帽子、焼き深く、のたれ込んで先き失り気味、返りは長め。なお本作は、鍔も白鞘もご自身で作られたものである。

素銅一重鍔(棟に金色絵) 白鞘

共箱つき(令和二年) 三〇万円



義人師の箱書

脇差

〈葵紋〉

以南蛮鉄於武州江戸越前康繼
(寛永—江戸) (二代)

江戸初期 約三九〇年前

鑄造り 刃長一尺四寸七分強(44・6cm) 反り四分
元巾一寸一分七厘 先巾九分九厘 重ね二分五厘

身巾広く、元先の巾差少なく大切先、重ねも厚い豪快な姿の脇差で、表に俱利迦羅、裏には阿弥陀如来像を力強い鑿で刻している。地鉄、板目に李を交えてやや肌立ち、地沸が微塵に厚くつき地景入る。刃文、焼き巾のあるのたれに小互ノ目や尖り調の刃を交え、小沸よくつき匂い深く、処々に金筋・砂流しかかる。帽子、焼き深く、浅くのたれて先き掃き

かけて小丸。

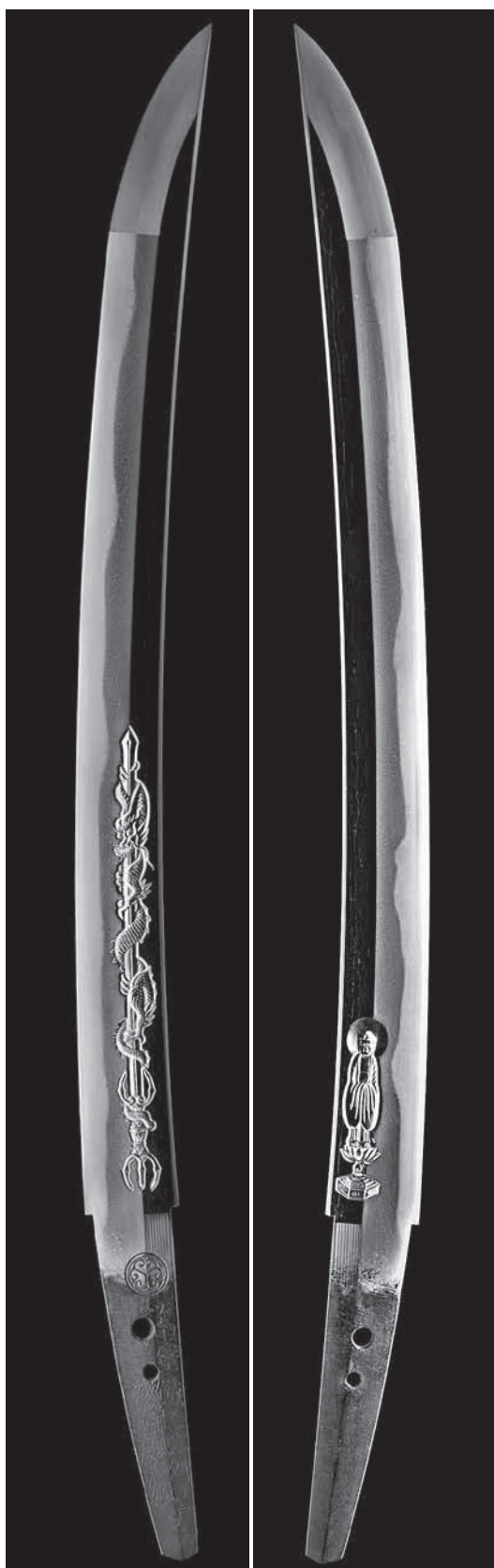
二代康繼は初代康繼の嫡子で、二代将軍秀忠からは江戸に屋敷を賜り、越前では藩主・松平忠昌により初代に給わった四十石に二百石が加増されるなど破格の厚遇を受けていた。作域は初代康繼の風を受け継ぎ上手であり、本作は慶長期の時代的特色をよく示し、巾広でかつ、豪壮な姿態となっている。また彫物も二代康繼の特色を遺憾なく発揮したもので、彫り口が深く、神仏にのっとり完成度の高い立派なものでさらに価値を高めている。昨年の重刀指定の名品である。

金着一重鐶 白鞘 本間薫山博士鞘書あり

『刀剣美術』令和3年6月号所載

重要刀剣(令和3年・第67回)

六五〇万円



全身を除いて原寸



脇差

青龍軒盛俊造之 文久二年壬戌二月日
弥山大権現宝剣 彫同作 行年六十一歳

(幕末—周防) 一六〇年前

平造り 刃長一尺一寸三分強
(34・3 cm) 反り二分 元巾
一寸四厘 先巾七分七厘 重
ね二分三厘



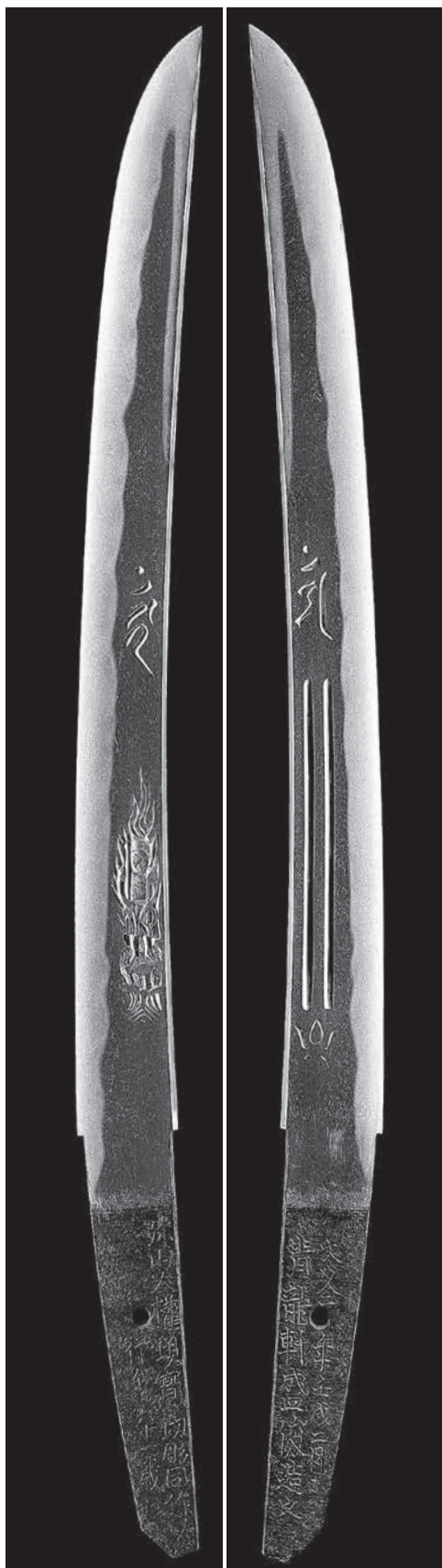
彫物原寸

平造りに身巾のある小脇差で、先反りつき、重ねあつてシツカリとする。彫物が価値を一段と高めており、表に梵字と火焰不動の立像、裏に梵字・護摩箸・蓮台を彫る。地鉄、板目が大きめに鍛えて肌目が立ち、小沸よくつく。刃文、焼き高めの互ノ目が直ぐ調に並び、沸よくついて足が入り細かい砂流しにかかる。帽子、互ノ目から小丸、返り長く焼下げる。盛俊は防州岩国藩工。岩国藩は長州萩の支藩。初め岩国の甲冑師に学び、刀工を志し、天保八年に江戸の長運斎綱俊に入門、また固山宗次にもついた。師の綱俊はよほど盛俊を信用したものか、のち子の是俊を遠く盛俊の岩国まで送り修業させたという。慶応三年66歳で没。本作は盛俊の傑作脇差。銘に神号が入り彫同作銘も入る。その彫りとは不動明王のことであるうが、まことに真摯で、盛俊の信仰心に裏付けられた作品で、たいへん貴重である。

金着二重鍔 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付 七十五万円

●次頁に続く



刀 越前守助広

寛文七年二月日

(江戸前期—大坂) 三五五年前

鑄造り 刃長二尺三寸(69・7cm) 反り四分三厘

元巾一寸一分二厘 先巾七分五厘 重ね二分五厘

定寸に反りやや浅く、元身巾タップリで中切先もシツカリ、重ね厚く重量があり、健全で力強い姿。

地鉄、小全目が鍊れてつみ、地沸厚くついて地景の

入る最良の鍛えで、大坂地鉄の最たるものである。

刃文、ビシツとした太直刃、刃縁の小沸は線を引くように美しく、処々小足入り、また二重刃がかるところや、葉がきれいに並んだりし切える。帽子、焼き深く、直ぐに小丸で先き掃きかける。

大坂新刀の雄・越前守助広は若い時から声望高く、濤瀾刃を生み出す五、六年前の30歳ごろ(寛文六年)には声価はすでに定まっていたという。本作の寛文

七年には、助広は幕府の要職である大坂城代・青山

因幡守宗俊に召抱えられ、銘に津田を冠するようになる(31歳)。今回の作は津田を冠してない同年二月

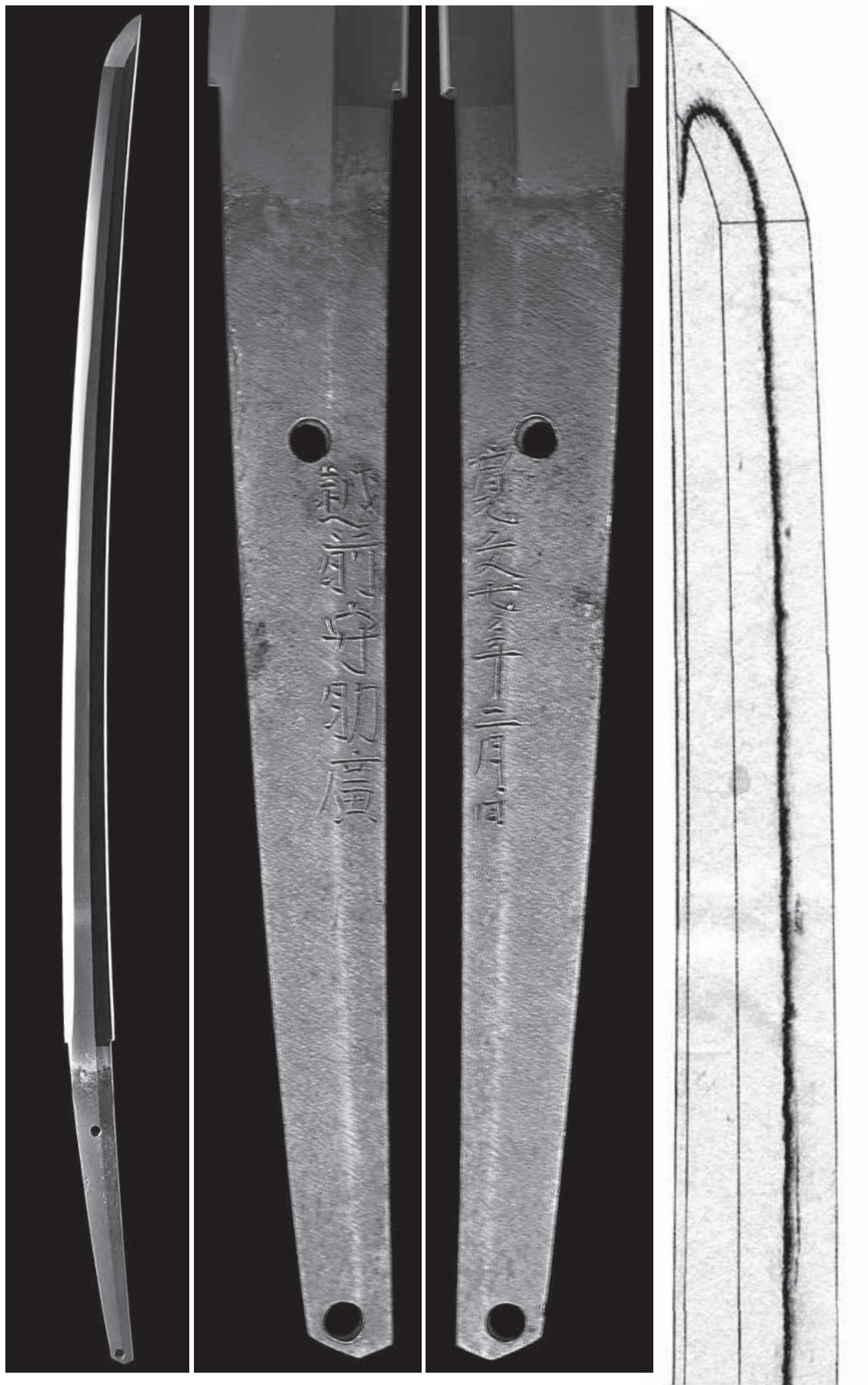
日の銘で、召し抱えられる寸前の作である。助広の濤瀾乱れは名高いが、それとは別に本作に見られるように直刃も非常に巧みであり、同地大坂の井上真

改の直刃と双壁である。本作は姿よく、地刃に優れ、助広前期の傑作の一振である。

金着二重鐙 白鞘

特別保存刀剣鑑定書付

六五〇万円



全身を除いて原寸

刀 源正雄^{まさお} 安政六年八月日

為西野源祐壽囑

以蝦夷地知岸内沙鉄造之^{えぞちしりきしない}

(幕末—江戸) 一六二三年前

鑄造り 刃長二尺三寸二分半(70・5cm) 反り六分
三厘 元巾一寸五厘 先巾七分九厘 重ね二分四厘
定寸に身巾広め、反り深めに先巾も落ちず中切先
が延び、鑄高く重ね厚く、凜とした健全な姿。地鉄、
小板目に柃が交じってよくつみ、地沸厚くつき、地

景入る。刃文、焼き高く浅い互ノ目が連なって並び、
小沸出来で刃縁に砂流しさかんにかかり、金筋も入
り、足が短く入る。元は直ぐ焼出しとなる。帽子、
一枚風に焼き深く、掃きかけて小丸に返る。

人気の清磨一門の優刀である。正雄は美濃出身で、
江戸に出て清磨門に入る。門下生の中では先輩格
で、同門の栗原信秀や清人がのちに清磨伝とは別の
作風の刀も作ったのに対し、正雄は終始清磨風であ
る。安政五年から万治元年の三年間は箱館に渡って、
その地の砂鉄で鍛刀した。当時、江戸幕府では、口

シアの北方からの侵出に備えて箱館奉行に命じ、五
稜郭の築城工事の真最中だった。正雄は、北方から
の脅威に備えて、五稜郭のお城備え刀を鍛造するた
め幕府から招かれ渡島したに違いない。幕府は当時、
箱館の東隣の尻岸内町の古武井に溶鉱炉を建設し、
付近の砂鉄をもって盛んに製鉄をしていた。本作も
その鉄で正雄が作刀した一振である。それを証する
添え銘に為銘を加え、中心は今切ったようである。

金着二重鍔 白鞘 佐藤寒山博士鞘書あり
特別保存刀剣鑑定書付 三六〇万円



全身を除いて原寸

刀 義人^{よしと}

平成壬申歳六月（平成四年）

（現代―東京都） 三〇年前

鑄造り 刃長二尺四寸七分半（74・9cm） 反り八分
元巾一寸一分 先巾八分二厘 重ね二分六厘

長寸で身巾広く、重ね厚く、反り深くついて中切
先が延び、表裏に棒樋を掻き流したキリツとした姿。
地鉄、小板目がよく鍛えてつみ、地沸よくつき、樋
に沿って映りが立つ。刃文、小沸づいた焼きの高い

丁子乱れに重花丁子を交え、刃中に足・葉よく入り、
匂いも深く、逆がかる丁子も交えて華やか。帽子、
焼き深く乱れ込み、尖りぎみに返る。

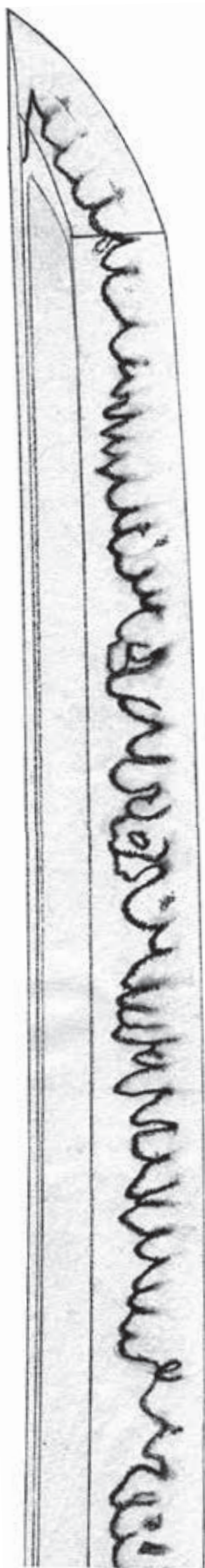
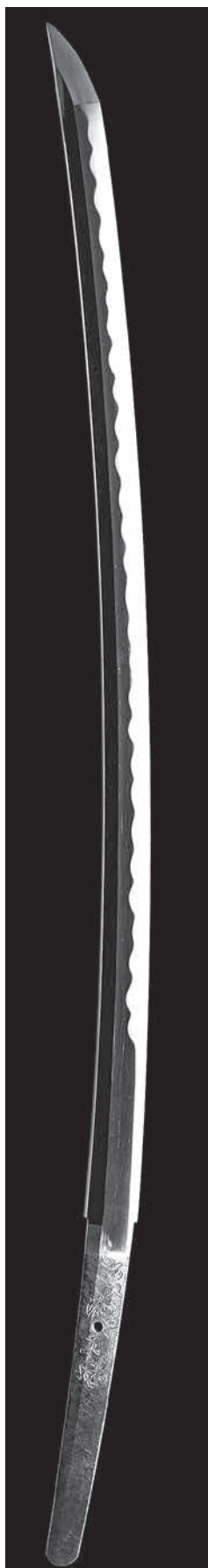
現代刀匠・吉原義人師の豪刀である。義人師は昭
和18年生まれ、弟の国家氏（前銘・莊二）とともに祖
父国家から作刀の手ほどきを受け、43年には新作名



刀展に初出品して努力賞を受けた。その後、有力な
賞を数々受け、約三十年前の57年に新作刀展におい
て無鑑査指定となっている。その後の活躍は華々し
く、相変わらずの現代刀の第一人者で、テレビに雑
誌にマスコミに登場する機会は現代刀匠中でも断ト
ツである。本作は49歳の華やか元気な時の作品で、
明るさが満ち満ちている。

上蓋金無垢・下蓋赤銅二重鍔 白鞘
共箱つき 三〇〇万円

●次頁に続く





太刀

宮入行平作

ゆきひろ

昭和四十九年春日

(昭和—長野県) 四八年前

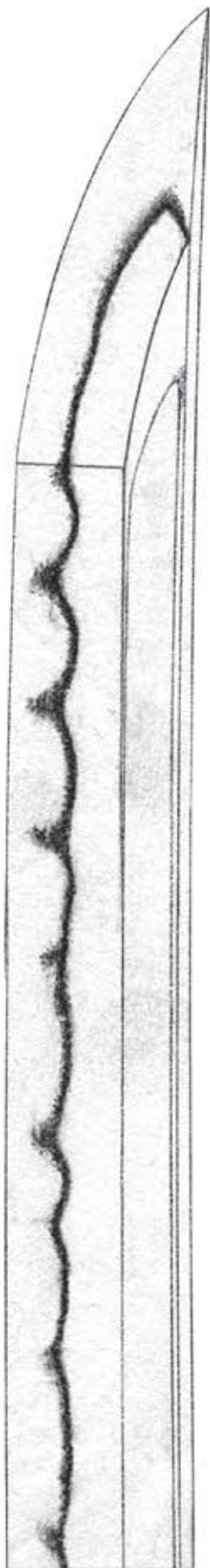
鑄造り 刃長二尺四寸八分(75・1cm) 反り八分強
元巾一寸一分 先巾八分六厘 重ね二分四厘
長寸で身巾広め、元先の巾差少なく、重ね厚く、
反り深くついて大切先が力強く延び、表裏に丸留め

の棒樋を掻き手応え十分。地鉄、板目よく鍛れて小板目があり、地景こまかに入り地沸ついて精美な肌合いとなる。刃文、浅い互ノ目を連らね、小沸よくつき匂い深く、刃中に太い足がよく入る。帽子、浅い互ノ目で焼き高く、先き沸つき掃きかけて返る。宮入行平(昭和48年以前は昭平)は大正二年長野県坂城町の生まれ。昭和12年に上京して(24歳)東京・赤坂氷川町の栗原昭秀の日本刀鍛錬伝習所に入門。

戦後、昭和30年の第一回の新作刀技術発表会で高橋貞次と並んで特賞を受ける。その後、連続して特賞を獲得し、38年(50歳)に重要無形文化財(人間国宝)に認定された。多くの弟子を養成し、苦勞を共にされた夫人に先立たれ、昭和52年に64歳で没。本作は人間国宝指定後の作品で、当時は穏やかな互ノ目が適度に高低をつける作風が多い。大切先の姿はよく、ビンとして力強く傑作の一振である。



昭和49年『第10回人間国宝新作展』所載
金着二重鍔 白鞘 四〇〇万円
全身を除いて原寸



短刀

岩井鬼晋磨正俊 万延元八月日
於上総鶴牧 赤心報国
(幕末—江戸) 一六二年前

平造り 刃長八寸一分強(24・6cm) 反りわずか
元巾九分八厘 先巾六分七厘 重ね三分一厘

大ぶりの重ねごく厚い短刀で、身巾があつて反りわずか、表裏に腰樋を深く刻した無骨な造り込み。地鉄、小板目が鍊れ、肌立つ柶目を交え、地沸が微塵につく。刃文、大きな互ノ目が高まり棟焼とつながるという刃文で、沸よくつき匂いがとても深く、足入り、刃縁にこまかい金筋かかる。帽子、焼き深

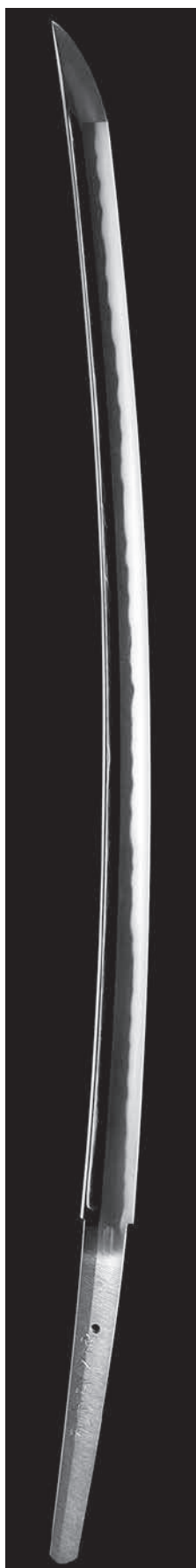
く棟焼につながる。(写真では棟焼きが強く写っていますが実物はそれほどではありません)

鬼晋磨正俊は高い身分の出で、文化11年下総関宿城主・久世広運の八男として生まれた。のち旗本・岩井家の養子となり江戸に住む。細川正義、直胤に学び、さらに清磨につき、その後、清磨門下の源正雄に学び、清磨一門の一人として人気が高い。本作は姿・刃文に清磨一門の特色が出て迫力があり、また中心一杯にきつた銘は気持よい。裏銘の鶴牧とは江戸後期に立藩した水野家一万五千石。城はなく陣屋で、千葉市と木更津市の間の海岸線の椎津村にあった。少し遠いが、まだ元気で行けたのであろう。五年後の元治二年52歳で没。拵は中身に合わせ変わった作で、鞘はごく太く荒石目塗。縁頭・小尻は鉄の同作、鐔は幕末の東竜斎風、返りと馬針を欠くが、いかにも幕末の風雲を想像させるものである。

素銅一重鋳 拵付(白鞘もあり)

特別保存刀剣鑑定書付 七〇万円

●ウラ表紙に続く



日本刀「現存の優品」

⑨4

令和4年7月1日

発行

発行所／(株)刀剣柴田

〒104-0061
東京都中央区銀座5-6-9
電話番号／03-3573-2801

FAX 03-3573-2804



1階の内部



地下の展示室



すずらん通りから見た新店舗1階の外観

移転しました。新店オープン！

3軒となり引越しました。(今年3月に)
旧ビル建替えのため10m先の1階・地階に新装開店です。
新しい店は気持ちよいです。即売会にお越しください。

〒104-0061 東京都中央区銀座5-6-9 1階と地下
(旧店の5-6-8の最後の「8」が「9」になりました。)

銀座刀剣柴田

郵便番号・電話番号・Fax などに変更はありません。



黒荒石目塗鞘短刀小さ刀拵 (縁頭・小尻) 網
に桜花びら図 鉄地 銀布目象嵌 真鍮象嵌 (目
貫) 桐紋三双 赤銅地 容彫 金色絵 (鑲) 虫食
み雀図 鉄地 撫角形 高彫 金色絵 土手耳
(小柄) 黒檀製 (柄) 白鯨着黒糸巻 (拵の総長
四二・五cm)

